

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720024

研究課題名(和文) インド新論理学派前期の言語理論思想史の解明 ラグナータまでの主要文献の調査と解説

研究課題名(英文) A Historical Study of the Linguistic Theory of the Early New-Logicians (Nayva Nyayayikas): Unpublished Commentaries of Jayadeva and Raghunatha

研究代表者

岩崎 陽一 (Iwasaki, Yoichi)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：40616546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、インド新論理学派の思想史研究に重要な進展をもたらす未出版の註釈『アーローカ』の校訂および電子公開と、別の註釈『ディーディティ』写本の真贋判定を試みた。前者については、校訂テキスト公開のためのXML制作環境およびバージョン管理機能を含む配信環境を構築し、公開することができた。後者については、現在知られている写本の情報にカタロキングの間違い等を発見し、容易には利用できないことが判明した。

研究成果の概要(英文)：This project involved the creation of new material for the historical study of Indian New Logic (Nayva Nyaya). (1) I edited Jayadeva's Sabdamanyaloka (chapters 1 to 5) and published it on my website. I used the TEI-based XML schema with minor extensions for the content, and the Bitbucket/git for its version control and distribution. (2) I attempted to identify all five manuscripts of Raghunatha's Sabdamanididhiti mentioned in the New Catalogus Catalogorum, along with the sixth one that was recently discovered in Kolkata. Finally, I confirmed that three manuscripts (1 Kolkata and 2 Varanasi) are mistitled; one (Leipzig) does not refer to any particular manuscript of Didhiti; and two in private collections are not locatable. There are, however, evidences that validate the existence of the Sabdamanididhiti.

研究分野：インド哲学

キーワード：写本研究 文献研究 思想史 インド論理学

1. 研究開始当初の背景

「論理学派 (ニヤーヤ学派)」はインドの古典的思想潮流 (哲学学派) のひとつで、論理と理性に中心的な価値を置く理論体系を特徴とする。『ニヤーヤ・スートラ』を根本典籍として紀元1世紀頃に学派としての体系を確立し、その伝統は現在も続いている。この学派の歴史は、ウダヤナ (10世紀)、ガンゲーシャ (14世紀)、ラグナータ (16世紀) という3人の大論理学者をマイルストーンとして、おおまかに次のように区分できる。

古典論理学派		『ニヤーヤ・スートラ』からウダヤナまで
新論理学派	前期	ウダヤナ以降、ガンゲーシャを経由して、ラグナータの前まで
	後期	ラグナータ以降

ガンゲーシャは『ニヤーヤ・スートラ』に代わる根本典籍『タットヴァ・チンターマニ』を著した者として、論理学派の思想史上、最も重要な論理学者と言える。しかしその思想的特徴は古典論理学派の最後を飾るウダヤナの著作で萌芽していたため、新論理学派の起点をウダヤナに置くのが近年の一般的な理解である。ラグナータはガンゲーシャの理論体系に多くの改革をもたらし、また論理学派の新たな学園を創設して、後期新論理学派を開始した。

現在、欧米やインドで新論理学派の哲学的研究が盛んに行われているが、その多くが、後期新論理学派の、特に17世紀以降の最後の諸文献を主な典拠としており、歴史的な脈から分離されたかたちで「新論理学派の哲学」が紹介されている。しかし、1000年ほども続く新論理学派の歴史において、「新論理学派の哲学」は、さまざまな契機を得て変化・発展してきた。(新たに提起される理論的および論理的問題を克服するために複雑化していつているので、その変化を「発展」と呼んでよいだろう。) 17世紀の学派の理論を評価するにも、思想史背景を踏まえなければ、そこで何が述べられているのかは理解できないだろう。筆者はこれまで、新論理学派の文献で「何が言われているのか」を、「なぜそう言われているのか」という問いを通して明らかにする研究を行ってきた。

新論理学派に関するこのような思想史研究は、1960-70年代のウィーンで、フラウヴァルナーとシュタインケルナーというインド文献学のふたりの巨星により進められたが、その研究を継承する者は少ない。近年、この方法での研究をリードしているのは我が国の研究者たちである。名古屋大学の和田壽弘氏は推理論と言語理論 (動詞語尾の意味論)、東京大学の丸井浩氏は言語理論 (勸告文の意味論)、大谷大学の山本和彦氏は推理論と宗教論の領域において、新論理学派の思想史研究と文献研究を進めてきた。筆者もま

た、これらの先達と問題意識を共有し、欧州伝来の厳密な文献学的方法にもとづいた思想史研究を行っている。平成20年から23年にかけては、これまで研究が手薄であった、言語理論の基礎的部分、具体的には『タットヴァ・チンターマニ』言語部第1章から第5章で展開される言語理解に関する理論について、ヴァーチャスパティ (10世紀) やウダヤナ、また対立学派のシャーリカナータ (9世紀) 等の文献と比較しながら、ガンゲーシャの言語理論がいかなる動機によって形成されたのかを検討した。(この研究は日本学術振興会特別研究員 (DC1) としての助成を受けている。) この研究により、ガンゲーシャの言語理論が形成された背景事情が明らかになってきた。それと同時に、ガンゲーシャの行った革新が後代の論理学者たちに受け入れられないことも、決して珍しくないことが判ってきた。これはつまり、ガンゲーシャより後の新論理学派の言語理論は、ガンゲーシャのそれとは異なる動機により形成されてきたことを示唆する。それを明らかにせずには、現在の新論理学派研究の対象として世界的な主流となっている17世紀以降の文献にみられる理論も、正當に評価することができないだろう。

しかし、ガンゲーシャ以降の新論理学派の言語理論の展開を追うには、出版されている資料が余りにも少ない。新ニヤーヤ学派の思想史に大きな足跡を残した、前期を代表する註釈者ジャヤデーヴァ (15世紀) と、改革者ラグナータの著作は、最低限整備しなければならない。ジャヤデーヴァの註釈については、筆者は平成20年に写本の蒐集を始めており、本研究計画の立案時に既に十分な数の写本が集まっていた。一方、ラグナータの註釈は、僅かな数の写本の存在が各地の写本カタログ等で伝わるのみで、現物を確認できなかった。その実在すら疑われている。しかし筆者は、平成23年にコルカタの図書館で、『タットヴァ・チンターマニ』言語部のラグナータ註と題された写本を、ぼろぼろになった手書きの蔵書リストに見つけ、その写真撮影してあった。ベンガル文字に似た、しかし筆者には解読できない文字で書かれており、その内容については未確認であったが、もしかしたらこれが、噂に聞くラグナータの言語部註釈かもしれない。このような写本資料が手元にある状態で、次項に掲げるような目的を実現するための研究計画を策定した。

2. 研究の目的

上記の研究背景にしたがって、本研究では、具体的に次の2点を目標とした。

- (1) ジャヤデーヴァによる註釈『アーローカ』の言語部第1章から第5章までの校訂テキストを作成する。出版に耐えるクオリ

ティの校訂テキストを作成するには膨大な時間が掛かるため、今回の研究成果をすぐに書籍として出版するのは困難である。しかし、研究成果は早急に社会に還元する必要がある。とくに、今回のように未出版の文献の校訂テキストの場合、それ早急に公表することのメリットは大きい。そのため、校訂テキストはインターネットで公開することにする。

- (2) ラグナータによる註釈『ディーディティ』の写本を可能な限り入手したうえで、解読し、真贋判定を行う。また、時間的な問題で校訂までは至らないと予想されるが、転写したデータをインターネットで公開する。

これら2点を具体的な実行項目とする。そのうえで、新たに利用可能になるこれらの文献にもとづいて、ラグナータに至る新論理学派言語理論の思想史展開を精査し、そこから得られる知見を随時論文として発表していく。

3. 研究の方法

(1) 『アーローカ』については、既に写本を5本入手している。これら以外にも良質な写本が多く存在しているため、下記(2)の実施過程で適宜新たな写本の入手を試み、資料に加える。基本的にこれらを用いて校訂テキストを作成していく。対象範囲の約3分の1については、これまでの研究で既に簡単な校訂テキストを作成してあるため、その作業を継続することになる。また、補助資料としては、『アーローカ』の断片を引用していることがこれまでの研究で明らかになっているルチダッタの『プラカーシャ』註およびマトウラーナータの『ラハスヤ』註が刊本で利用可能であり、またルドラバッタによる複註『ヴィヤーキヤー』の写本を入手してある。

成果のインターネット公開に際しては、校訂テキストの初期の段階から公開を開始し、随時、訂正を加えたり、また、新たな写本が手に入ればそこから得られる異読を追記したりする。その際、ネットでの研究成果の公開に関してしばしば指摘される「勝手に更新されたら資料の永続性が保てない」という問題を回避するため、簡単なバージョン管理システムを導入し、筆者がいつ、どのような改訂を行ったかを完全に記録すると共に、Wikiシステムのように、利用者は過去のどのバージョンにもアクセスできるようにする。そのために、校訂テキストの電子データはXMLで作成する。当該システムは筆者自身で開発する。

(2) 『ディーディティ』言語部については、サンسكريット写本の所在の集成である *New Catalogus Catalogorum* に5つの写本のデ

ータが記載されている。それに加え、前述の、筆者がコルカタで入手した写本がある。これらの資料に可能な限りアクセスし、その内容を調べ、それがほんとうに『ディーディティ』のであることが確認できたらならば、その電子転写データを作成し、上記と同じ手法を用いてインターネットで公開する。まずは手持ちのコルカタ写本から解読を試み、他の写本については毎年の休暇の時期を利用して計画的にインドの図書館を訪問して調査する。なお、コルカタ写本については、知らない文字で書かれているという根本的な問題を抱えているため、ベンガル人研究者に協力を仰いで、まずは文字の解析と習得から開始しなければならない。

真贋判定の方法としては、まずは冒頭の帰敬偈やコロフォン等が手がかりとなるが、写本では往々にしてこれらの部分が欠けている。これらに頼れなければ、内容に踏み込んで検討することになる。その場合、先行註釈(ジャヤデーヴァとルチダッタ)に言及していることと、後続註釈(マトウラーナータ)に言及されていること、或いはそれに言及されていないことが、大きな判定要素となる。もしその写本がほんとうにラグナータの著作であれば、彼の少し後に活躍したマトウラーナータの註釈には必ず引用されているはずである。マトウラーナータは先行する註釈の解釈に言及するとき、「伝統派はこう言う」「新派はこう言う」「超最新の者たちはこう言う」というような導入句を添えて引用する。マトウラーナータがラグナータに言及するときの導入句の付け方の癖を分析することにより、それを手がかりに真贋判定を進められるかもしれないという見通しを立てている。

4. 研究成果

(1) 上述した手法で校訂テキストのデータを作成するために、まず、XMLのスキーマを定めなければならなかった。人文学の資料を電子化する際の国際的標準として定着している TEI P5 ガイドラインには写本校訂のためのモジュールが含まれているので、それを採用することに躊躇はなかったが、それだけでは不十分だろうということも予想された。例えば、サンسكريットの註釈文献を組版するときは、註釈対象となる元のテキストの引用箇所を強調して示す習慣がある。写本では、黄色や朱のマーカーで色を付けて示される。これは `` 要素の属性を用いて表現できるように拡張した。また、TEIのガイドラインでは、写本のページが変わり目は `<pb />` 要素で表現せよと言われているが、これは章の変わり目など内容上の転換点で強制改ページを行う際にも用いられる要素であり、写本に記述されたテキストの形態的属性を表現する際にも使い回すのは適切でないと思われる。そのため、写本の改ページを示す

<mspb /> という要素を新たに定義した。こういった細かい拡張をスキーマに対して施し、またそれに対応する XSLT スタイルシートを作成した。

バージョン管理システムとしてはオープンソースの git を利用し、リポジトリは商用サービスの Bitbucket (無料版) に置くことにした。リポジトリの運営をこのような第三者のサービスに委ねることにより、筆者がこっそり更新することもできなくなる。筆者の勘違いで読みの選択が不適切だった箇所を修正するときなど、みっともないのでこっそり更新してしまいたくなることもあるが、それらもすべて公開することにより研究の透明性と公開データの信頼性が高まり、ネット公開を紙媒体での出版よりも劣ったものとみなす通念を問い直すことができるだろう。

Wiki システムで実現されている差分表示機能に類するものを実現するため、暫定的な実装として、XML を XMLLint でフォーマットし、diff で差分を取得するようにした。しかしやはり可読性の点では優れているとは言えない。XML の差分表示の技術はまだ発展途上であるが、今後新たなツールを試し、優れたものでリプレースしたい。

以上のような環境で、予定していた範囲の校訂テキストを、本研究の期間内に公開することができた。他の研究者たちからは、口頭では、優れたシステムであるとの評価を受けている。しかし今後、このシステムの妥当性と問題点とを、人文情報学の学界でも問わなければならないだろう。幸いにも、同じ仕組みで『アーローカ』の続きの箇所の校訂テキストを作成・公開する研究計画が助成対象に採択され、27 年度から実施している。この新たな研究プロジェクトにおいて、公開方法の改善を図っていく予定である。

(2) 『ディーディティ』言語部写本の真贋判定について。まず、初年度に、筆者が複写を所持していたベンガル写本の解読に着手した。文字は古いベンガル文字に似ていたため、コルカタに赴き、写本図書館の研究員やサンスクリットの研究者に文字を見てもらったが、皆、3 割程度の文字しか識別できない。そこで、ベンガル出身で、デリーでサンスクリットの研究をしている Manji Bhadra 氏と、同じくデリーで写本学の研究をするベンガル人 Deepro Chakraborty 氏に相談したところ、これが「ミティラー文字やティルフタ文字の影響が見られるベンガル文字」であることが判った。さらに、国際仏教学大学院大学の堀伸一郎氏から事前に教示を受けた、古いベンガル文字に関する Dimitrov の研究を参照し、また写本解読を得意とする東京大学大学院インド哲学仏教学研究室の大学院生、日比真由美氏の助力を得て、なんとかこのコルカタ写本を読解できるようになった。非常に多くの研究者の力を借りたので、ここに謝辞の代わりに経緯を述べさせて頂いた。

しかし、苦勞して読解したコルカタ写本の中身は、(1) で校訂している『アーローカ』と同じであることが判明してしまった。単なる、写本のタイトルの誤りである。コルカタ写本は『アーローカ』の古い写本としては高い価値を有するが、『ディーディティ』言語部の写本を求める研究の対象からは外れることとなった。

New Catalogus Catalogorum には、他に次の 5 点の写本が記載されている。① Leipzig No. 943 ② Benares No. 177 ③ Sarasvati Bhavan No. 178 ④ Oppert 1 No. 3447 ⑤ Oppert 1 No. 5997。

① の資料は、『ディーディティ』推理部に「この問題については『ディーディティ』言語部で説明することになる」という記述が見られることを示すだけで、言語部の写本の所在を示す情報ではなかった。また、ラグナータは「説明することになる (vivecayisyāmas)」と言っているだけで、既に『ディーディティ』言語部を著したと言っているわけではない。これは、『ディーディティ』言語部の実在を証明するものとはならない。

② と ③ はバラナシにある同じ写本についての言及と考えられる。筆者はバラナシに赴き、その写本を確認したが、その中身はラグナータの、既に出版されている『アーキヤータ・ヴァーダ』と同一であった。これもまた、カタログ担当者によるタイトルの付け間違いである。

④ と ⑤ は 1880 年に南インドの個人が所有していた 2 本の写本を示している。かつて個人所蔵だった写本は、近年、大学図書館に移管されるようになってきている。そのため筆者は、これらを求めて、ケーララ州トリヴァンドラムのケーララ大学図書館を訪ねた。そしてキュレーターの Shaji 氏の協力を得て所在を調べたが、ケーララ大学には所蔵されていなかった。Shaji 氏が言うには、タンジョールの図書館にある可能性が高いらしい。そこで筆者は、本研究の最終年度に、タミルナードゥ州タンジョールのマハラジャ図書館を訪問したが、そこでも所蔵を確認することはできなかった。これらはいまだ個人宅にあるか、散逸したか、或いはカタログされないまま図書館の片隅に積まれるかしているはずである。今すぐにそれにアクセスすることはできない。

こうして、八方手を尽くしたが、『ディーディティ』言語部の写本を得ることはできなかった。しかし本研究の過程で、偶然、ラグナータに近い時代の後期新論理学者が「これについては『ディーディティ』言語部に書いてある」と述べている資料を発見した。つまり、『ディーディティ』言語部は実在したか、或いは後代の論理学者がそれとみなしていた、実際はラグナータのものではない註釈書が存在していたと言えるだろう。筆者は、後者の可能性が高いのではないかとみている。やはり、ラグナータが註釈を残したとしたら、

彼の生前からの知名度と権威を考えると、それが完全に散逸してしまうとは考えがたい。もし、何か違う文献が『デーディティ』と勘違いされていたならば、その「何か」の候補として有力なのは、シャンカラミシュラカガダーダラによる註釈である。いずれも、たとえ筆者が求めているものでなかったとしても、新論理学派の思想史を知る上できわめて重要な資料となる。今回の研究を通してこれらの写本の所在は突き止めてあるが、いまだ複写許可を得られていない。今後はこれらの写本を調査したい。

(3) 写本校訂や写本の複写の取得は、それ自体では学会で発表するような成果とはならないが、主に『アーローカ』の解読によって新たな知見を多く得ることができ、それらを学会発表や論文のかたちで公表してきた。実績表に掲げた8本の論文は、いずれも『アーローカ』や、それと併せて研究したルチダッタの『プラカーシャ』の理解に支えられている。特に論文②は、ガンゲーシャの理論が後代に受容されなかったことの根拠を問う、本研究の最初の問題意識を扱っている。この論文では、後期新論理学者たちが「言語理解」という人間の活動を分析の出発点とするのに対し、ガンゲーシャは「言葉」という外的なものを出発点として理論を組み立てていたという違いがあることを指摘した。①と⑥は、ジャヤデーヴァやルチダッタが如何にしてガンゲーシャの理論に改定を加え、後代に定説として採用される理論を形成するようになるかを、ふたつの個別的トピックについて調査して整理したものである。このほかにも、今回の研究成果にもとづく研究発表の申請をいくつか行っているため、27年度中も成果発表を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

- ① Yoichi Iwasaki. "Problems in Postulating *Tātparyajñāna* as a Requisite for the Generation of Verbal Understanding." *Sanskrit Vimarsah* 7. Forthcoming. 査読有.
- ② Yoichi Iwasaki. "Two Perspectives of Naiyāyikas' Theories of Verbal Understanding." *Samvit Satyaloka: Prof. S. R. Sharma Felicitation Volume*. Forthcoming. 査読有.
- ③ 岩崎陽一「*Tattvacintāmaṇi*における *pramāṇa-śabda* の意味」『印度學佛教學研究』63(2): 205-209. 2015. 査読有.
- ④ 岩崎陽一「所有と相続の形而上学」『インド哲学仏教学研究』22: 69-89. 2015. 査読有.

- ⑤ 岩崎陽一「ガンゲーシャの言葉補充説」『インド論理学研究』7:301-314. 2014. 査読無(招待論文).
- ⑥ Yoichi Iwasaki. "Svarūpayogyatā and *Ākāṅkṣā*: On the Meaningfulness of Sentences According to Navya-Naiyāyikas." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 62(3): 1162-1166. 2014. 査読有.
- ⑦ 岩崎陽一「神と聖典をめぐる異宗教間のアライアンス」*Bulgyoung Suyong-gwa Jeongae Bulgyowa Tajong-gyowau Daehwa*. 21-45. (pp. 33-45 は韓国語訳.) 2013. 査読無(招待論文).
- ⑧ 岩崎陽一「情報の信頼性の問題をインド哲学から考える」『比較思想研究』39:102-110. 2013. 査読有.

〔学会発表〕(計 12 件)

- ① 岩崎陽一「所有と相続に関するインド論理学派の形而上学」「コモン・ローとヒンドゥー法の邂逅—ウィリアム・ジョーンズ研究」研究会, 2015/2/7. 東京大学(東京都・文京区).
- ② Yoichi Iwasaki. "Gaṅgeśa's Theory of *Śabdādhyāhāra*." 47th All India Oriental Conference, 2015/1/3. Assam (India).
- ③ 岩崎陽一「所有と相続の形而上学」ダルシャナ科研第4回合同研究会, 2014/9/13. ホテルニューことぶき(長野県・松本市).
- ④ 岩崎陽一「*pravṛtti* と *pramāṇa-śabda*—初期新ニヤーヤが論じる「信頼すべき言葉」の一側面」日本印度学仏教学会第65回学術大会, 2014/8/30. 武蔵野大学(東京都・江東区).
- ⑤ Yoichi Iwasaki. "Why is This My Body?" *The Living Philosophy and Cultures of India: A Two-week Summer School*, 2014/8/6. Kerala (India).
- ⑥ 岩崎陽一「神と聖典をめぐる異宗教間のアライアンス」東京大学・金剛大学第1回学術交流セミナー, 2013/9/25. 扶余(韓国).
- ⑦ 岩崎陽一「新ニヤーヤ言語論における *ākāṅkṣā* 導入に関する問題の検討」日本印度学仏教学会第64回学術大会, 2013/9/1. 松江市民会館(島根県・松江市).
- ⑧ Yoichi Iwasaki. "Naiyāyika-s' Theories of *Śabdaprāmāṇya*: Being Interpreted as Norms for Assessing Credibility of Information." *The XXIII World Congress of Philosophy*, 2013/8/7. Athens (Greek).
- ⑨ 岩崎陽一「インド新論理学(Navya Nyāya)の意味論」京都大学 CAPE ワークショップ: 哲学とインド学のコラボレーション *Aspects of Philosophy of Language*, 2013/8/3. 京都大学(京都府・京都市).
- ⑩ Yoichi Iwasaki. "The Three-factor and the Four-factor Theories of *Śabdabodha* of

Navya Naiyāyikas.” 第二屆梵學與佛學研討會, 2012/11/9. 台北 (台灣) .

- ⑪ 岩崎陽一「言語理解は推論に還元できるか——ジャヤンタとヴァーチャスパティを中心に——」日本印度学仏教学会第 63 回学術大会, 2012/7/1. 鶴見大学 (神奈川県・川崎市) .
- ⑫ 岩崎陽一「情報の信頼性に関する比較思想的考察——現代の問題をインド哲学から考える——」比較思想学会第 39 回大会, 2012/6/23. お茶の水女子大学 (東京都・文京区)

〔その他〕

ホームページ等

<http://nyaya.shastra.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎 陽一 (IWASAKI, Yoichi)

東京大学・大学院人文社会系研究科・特任
研究員

研究者番号：40616546